



おじさんズ通信

2022年12月号 (No25)

発行元：登別市新生町4丁目緑風舎

発行者：おじさんズ3号

Web
http://www.ne.jp/asahi/takanet/mori/

落ち葉でアートだ

少々トリックめいた右の写真は、登別市立図書館横の市民憲章碑裏手に敷き詰められた落ち葉の絨毯です。11月初旬の午後、ちょうど隣の建物との間から差し込んだ陽光が背に当たり、カメラを手にした私の長い影を浮かび上がらせました。一石二鳥のシャッターチャンスと、あれこれ角度を変えながらパチリ、またパチリ。

う～ん、この写真だけではチョット芸がないな。というわけで、今度は自宅近くの亀田公園に出かけ、プラタナスの大きな落ち葉を数枚、頂戴して帰宅。写真と重ね合わせ、額縁に収めました。

「これぞ、落ち葉でアート」と悦に入りましたが、一人占めはイケマセンと天の声が聞こえたような。結果、図書館2階の雑誌・文芸誌コーナーの上に置かせてもらいました。「ちよこっとギャラリー」のタイトル付きで。

さらに、せっかくなので1か月に1度ほどのペースで、作品を入れ替えることにしました。めぐらせば、「押しかけミニ・ギャラリー」の素材は意外とあるもので、この通信25号が出るころは、「登別日活ホテル」や「青嵐荘」などのマッチのラベル12枚を収めた2作目を飾る予定です。割り込みされる方、大歓迎です。



サケは「ファイト！」

秋の1日、撮影に出かけたのは、ふる里の川に必ず鮭が上ってきているはずとの思いからでした。

まずは鉱毒、そしてダム建設で遡上の歴史が一時途切れ、その後ダム下流の自然産卵場所まで遡上しているといわれる幌別川へ、いざ見参！

いました。桜木町の桜新橋の上からのぞくと、三匹が悠然と行ったり来たり。川の中央には旅の途中で息絶えたか、ホッチャレが目に入りナムアミダブツ

次は、近くに実家があった来馬川へ移動。図書館近くの常盤橋でも一匹発見しました。幌別川に比べて水の濁りはなく、貧弱なる我がカメラ砲でも、その姿をしっかりと捉えましたが、御覧の通り、鱗の一部は剥げ落ち満身創痍の体。中島みゆきの「ファイト！」を口ずさんでいました。

通行中のオジさん、お爺さん（と、こちらも言えた義理じゃないが）達は、必ずひと声掛けます。

「なんか、いるの？」。

「サケがあそこに」

「へえ～、どこ？」



（こっちに聞かないでよ。近くなんだから、たまには自分で観察して彼らに声援、送ってよ～。わたくし同様、どうせ、ヒマなんですよ）

と、もう一人の私が陰でぼやいておりました。

朝日がのぼれば

「朝日がのぼれば毎日がユウツだ」とは、数十年前に聞かれた某企業のなげき節。「ヨミウリだけは、わが道ゆく」とくれば、おわかりでしょう。

けれど三大全国紙の販売部数争いも、今は昔の物語です。ブロック紙、地方紙を含め新聞業界は発行部数の右肩下がりが止まらず、四十代で新聞をとっている人は、最近の調査で13%とか。満員電車の中で、サラリーマンらしき人々のほとんどが、スマホとにらめっこしている光景を見ると、宜（むべ）なるかな。

一方、何年たってもほぼ変わらないのは、朝日が昇る時刻で、この時期、朝起きると頭の中に浮かぶのは「午前7時5分」というタイムスタンプ。これ、1年のうちで最も遅い室蘭地方の日の出の時間で、元日の数日前あたりから、1、2週間は続くはず。

なぜ記憶しているかということ、室蘭・地球岬の初日の出取材を機にがっちりインプットされたからです。同時に、「ここを過ぎれば、日一日と夜明けが早くなる」と、何かしらの希望が湧いてくるから不思議です。

「八十日間世界一周」

戸塚の駅前商店会で美川憲一が、ビール瓶の箱の上で「柳ヶ瀬ブルース」を歌い、(やっぱり、都会だな)と感心した18歳のヨコハマ時代。たまには、と東京まで出かけ洋画も見ましたが、そのシルシというべき1冊に久方ぶりに対面しました。



家の2階を片付けていた山の神が「これ」と差し出したのが「八十日間世界一周」のガイドブック。

日本公開が1957年だから、渋谷あたりで見たのはリバイバル上映作品だったのでしょうか。出口で買い求めましたが、値段は忘れまして。それにしても60年近くの間、何度か転居を繰り返す中で、ご主人様を忘れず離れぬ忠義心、あっぱれです。

これに関係する出来事がもう一つ。この日の夜、テレビの「世界ふれあい街歩き」を見ていたら、訪問先がフランス・ロワール地方の都市ナントで、当然、映画の原作者ジュール・ヴェルヌの生まれ育ったマチであることも紹介されました。

昼に、スクリーンに映し出された世界をめぐる冒険映画を思い出し、夜にはその物語を生んだSFの父の故郷にTV画面で出会う、ナントという偶然でしょう。

ナツズイセンとK砦

竹か、あるいは太いイタドリで作ったと思われる手製の額縁に飾られた写真の花は、ヒガンバナ科のナツズイセン。凜として立ち、淡い紅紫色の花びらをふんわり広げたその姿は、まさに夏真っ盛りの野山を訪れた散策びとを手招きしているようです。

郷土文化研究の先輩であるKさんから、この秋届いた自然のアルバムの1枚。市販のフォトフレームではなくハンドメイドにこだわった遊び心がじんわり伝わり、早速、部屋に飾りました。

よく見ると、奥に「自分で建てた」という山小屋風の建物が写っています。場所は散歩道である札内の山中。鹿道があって、来年には是非、ご一緒させていただきませうと予約しました。

ついでに勝手ながらこの小屋を「K砦」と命名しました。夏の一曰、「賢治的」世界にひたるか、あるいは山伏、野武士、それとも山賊になってみるか。すでに心の山野で遊びほうけています。



文芸のぼりべつ 42号

作品募集中ですぞ

創作・童話・俳句・短歌・川柳・郷土史・自分史・紀行文・詩・SF・随筆など。なんでもOK
詳細は、おじさんズ3号まで。



詐欺鉄砲、数打ちや当る?

還付金や施設入居権などを話の糸口に、電話でまんまと大金をだまし取る事件が、後を絶ちません。もっとも、こちらは元々老後の蓄えがないから、そんな甘言に乗りようがありませんので、まず大丈夫。

もう一つ、毎日送られてくるのが、フィッシング詐欺メール。アマゾンやカード会社を語る手口は以前紹介しましたが、最近使ってもいない「楽天銀行」や「PayPay銀行」の口座がナンチャラカンチャラ。

笑っちゃうのは、車に取り付けていない高速道路用のETC案内。「ご利用ありがとうございます」の前に付いた文字が「ザービス」になっている。おまけに「フィッシングメールが氾濫し、」ときたから、(お前が言うな!)と怒っちゃいました。

何とか言いくるめて「ここをクリック」させたいのだろうが、そうは問屋が卸さん之助。ゴミ箱にポイ捨てですが、消去作業のなんと煩わしいことか。

薫風 烈風

▶というわけで、本通信も25号の節目を迎え、思わず遠くに来たもんだ、かな?

お日さまとお月さまと雷さまが宿に泊まり、翌朝、雷さまが起きると2人がいない。宿の主人が「お連れ様は、もうお立ちです」と言うと、雷さま「う〜ん、”月日、がたつのは早いものだ”。

おはずかしい落語のまぐらの引用ですが、通信発刊から2年が過ぎたんですね。まこと「歳月、人を待たず」です。

▶賛同してくれるマチ場の商店や施設に本を置いて、感想文をやりとりする「登別まちライブラリー」の代表Mさん。文化団体の高齢化が進むなか、地域活動の一翼を担う貴重な若い存在です。先日も、「文芸のぼりべつ41号」を市内の高校に出向き、寮の書籍コーナーに置いてくれたり、別の高校担当教諭を紹介してくれたり、非常に助かっています。「焦らず、マイペースで」タイプで謙虚な人柄がうかがえます。こういった、地域文化を創造する若い人々が更に出てくることを願い、皆さん、お元気で〜。